



Title	江戸戯作の研究 : 山東京伝の諸活動を中心に
Author(s)	有澤, 知世
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/61407">https://hdl.handle.net/11094/61407</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 論文内容の要旨

氏 名 ( 有澤知世 )	
論文題名	江戸戯作の研究 ——山東京伝の諸活動を中心に——
<p>論文内容の要旨</p> <p>本論は、山東京伝（宝暦元年〈1761〉—文化十三年〈1816〉）の諸活動についての考察を中心に行い、江戸戯作が文化文政期の文芸においてどのような存在であったのかについて明らかにすることを旨としたものである。</p> <p>本論では、「戯作」という用語の定義を「近世後期の前半の小説、黄表紙、洒落本、談義本を主体とする前期滑稽本に、前期の読本、前期の小咄本などを加へたもの」を狭義としたとき、それに近世後期後半の小説である合巻、滑稽本、咄本、人情本などを加えたものを総括する語であるという、中村幸彦（『戯作論』角川書店、1966年）に従い、特に「江戸戯作」は、江戸で生産された戯作という意味で用いる。また、主に寛政の改革以降の作品を扱い、江戸戯作という場合も、特に断らない場合は後期の戯作を指している。</p> <p>寛政の改革を境に、それまで江戸戯作を切り拓いてきた武家作者達が退陣して職業的作者在り登場し、時代の要請により教訓的な作風へと移行する。また、担い手や作風の変化により、知識人のみならず女性や子どもといった層も戯作に親しんだが、それは同時に、市場が広がったために戯作が商品としての性格を強めたことをも意味する。戯作者は、毎年大量に「売れる」戯作を制作しなければならなくなったのである。</p> <p>つまり後期の江戸戯作は、身分の高い人間や知識人が余技として行う遊びという本来的な「戯作」とは、基本的には意を異にするものであると考える。</p> <p>また、戯作者の生活の在り方も一変する。</p> <p>たとえば京伝や式亭三馬は、執筆活動と同時に自分の店を経営しており、自らの文名が大きな魅力となって顧客を呼び、潤滑な経営を支えていた。そしてまた、店を経営するということは、収入面での支えであることは勿論、「本業」を持ちつつ戯作を行うという「戯作者像」を演出することでもあった。京伝や三馬の作品中には、自店や戯作者仲間店の商品の宣伝がしばしば掲載されており、彼らの「本業」を意識せずに作品を読むことは難しい。</p> <p>このように、彼らの実生活と文筆活動とは相互に作用しあっている。すなわち戯作者という存在そのものが、作品と密接不可分なものであったのである。</p> <p>一方で、戯作者が考証活動を行っていることは見逃せない。</p> <p>曲亭馬琴が「隨筆物近年ハ少々流行いたし候へ共、一体うれかね候品ゆゑ板元まれに御座候」と述べるように、考証とは、成果を出版物として刊行することが難しく、自らと同好の士のために行っていたものであると考えられ、商品として社会に広く受け入れられることを目指す戯作とは異質なものではある。</p> <p>しかし好古の面々との交流は遊興性を伴っており、会での遊びと作品とが深く結びついていた前期戯作と同じく、そこで得た情報や知識が戯作に活かされるという一面もあった。考証と戯作もまた、切り離して考えることができないものである。</p> <p>以上を踏まえると、戯作研究を進めるうえで、作品自体のみならず戯作者の様々な活動にも十分な目配りを行う必要があるように思われる。</p> <p>先行研究においては、京伝が戯作執筆のみならず、店の経営や考証活動といった多様な活動を行っていたことが指摘されながらも、それらが総合的に意義付けされているとは言い難い。特に文学研究の立場からは、戯作作品のみに重点がおかれ、戯作者の戯作執筆以外の活動は、作品の付随的なものか、作品とは全く離れた存在として扱われてきたという問題がある。戯作の文化的・社会的位置づけを行うには、作品内部についての研究と、外的な要素に関する研究とを平行して行い、それらの相関性について考察を行うべきであるという問題意識に基づき、本論を構成したつもりである。</p> <p>以下、各論考の内容について簡単に述べる。</p> <p>第一部では、京伝の草双紙制作方法について考察を行った。典拠の指摘を行い、それをどのように利用しているのかを明らかにすることによって、作品制作の方法と作者のジャンル意識について解明することを目指した。</p> <p>第一章では、京伝の黄表紙『唯心鬼打豆』が、朋誠堂喜三二作の黄表紙に大きく拠りつつ、上田秋成『雨月物語』</p>	

「夢窓の鯉魚」をも利用していることを指摘し、従来の説よりも七年早い時期に上方読本から江戸戯作への影響があることを明らかにし、当時の江戸戯作界において、『雨月物語』が注目されていた可能性について述べた。第二章では、京伝が合巻作品でしばしば〈図会もの〉を用いることに注目し、『日本山海名産図会』と『撰津名所図会』の利用例について、その具体的な利用方法と作品に与えた効果について指摘した。第三章では、合巻作品において他ジャンルの作品を素材として利用する場合の工夫について、作品構成に注目して述べた、また、考証随筆で扱われている考証の内容が、作品に反映されている事例を指摘した。

第二部では、より商業性を増した文化文政期の戯作において、読者の歓心を買うためにどのような工夫を行っているのかについて考察し、当時の戯作界の様相について示すことを目指した。

第一章では、当時の作者が、作風の流行の変化に対して如何に敏感であったかについて、小枝繁の読本で京伝作の合巻が利用されていることに注目して述べた。第二章では、京伝と三馬とがお互いに近い刊記の作品を利用し合うことによって、周知のモチーフに、効果的に変化を加え続けていることを指摘した。第三章では、京伝の読本『本朝酔菩提全伝』に登場する野晒悟助が身につけている着物の髑髏模様が、後世の戯作のみならず演劇・浮世絵等の文化表象全般に影響を与えたことを明らかにし、隣接するジャンル間の交流が盛んであったため、作者と読者の間に共通認識が形成されやすかったことを述べた。第四章では、三馬が執筆した広告文に注目し、著名な戯作者の名前には商品価値があり、全国的な〈ブランド〉であったことを指摘した。

第三部では、京伝の交遊と文事との関わりについて論じた。

第一章では、従来美術史的な観点で説明されてきた、京伝の合巻作品にみられる異国意匠の取材源を探索し、蘭学者森島中良が舶来のラベル類を集めた貼込帳がそれであることを指摘した。そしてそれは、当時近藤正斎や大田南畝周辺の知識人たちの間で〈異国ブーム〉が興っていた影響であることを明らかにし、知識人たちの動向と戯作とが深く関わっていることを述べた。第二章では、狩野派の絵師菅原洞斎が、絵師の落款、印章や伝記を集めた『画師姓名冠字類鈔』への資料・情報提供者に注目し、古書画に関する考証趣味のネットワークの一端を明らかにした。京伝もまた本書に考証を提供しており、ネットワークの一員である。当時における京伝の社会的位置を考えるうえで、考証趣味のネットワークの解明が必要であることを指摘した。そして付章として、洞斎が主催した古書画展観会の内実について、参加者の一人であった屋代弘賢の書留を手掛かりに明らかにした。『画師姓名冠字類鈔』や、同じく参加者であった谷文晁の『文晁画談』等、会の関連資料を併せて参照することで、席上でどのような資料が披露されたのかを明らかにし、議論の内容を再現することを目指した。

これら十本の論考を通して得た答えを以下に示す。

まず戯作者の存在そのものが〈ブランド〉であり、彼ら自身もそのことに自覚的であった。

彼らを〈ブランド〉足らしめるのは、作品の評価である。戯作者たちは時流に適う作品を作り続けるために、同時代の作品をよく意識し、新たな工夫を貪欲に行っていた。また短期間で作品を量産するために、様々な素材を自家菜籠中のものとし、作品制作の方法を確立するよう努めていた。

このような姿は、第一線で活躍し続けるために自分の存在を主張し、常に新しさを求め、多くの人を楽しませようとするものである。その意味で戯作者は、進化を続ける存在であったといえる。

そしてその一方で、考証趣味のネットワークを通して一流レベルの学問と関わっていった。

ネットワークを通して得た知識や資料を、戯作の中で自由に活用していることは、知識人たちの興味や関心を、俗文芸に落とし込む役割を果たした点で重要である。

ただし考証の成果は、必ずしも営利や名声とは結びつかないものであった。同好の士との交流から垣間見えるのは、真実を希求する真摯な姿であり、古の文物と誠実に向き合おうとする姿である。このような側面は、常に新しく在り続け、自ら商品足り得ようとするもう一つの側面とは、逆の方向を志向しているようにも思われる。

そのような二つの側面を両立させたのは、彼らの飽くなき探究心ではなからうか。

言い換えれば、戯作者とは探究心を原動力に、雅俗を行き来する存在ではなかったか。

本論では、山東京伝という戯作者の中にこの両側面が違和感なく同居し、彼が様々な営為を通して自らの血肉とした〈知〉は、その文事に普く反映されていたこと、そしてそれが身分や職業を問わず、当時の人々に広く愛されたことについて論じた。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 有 澤 知 世 )	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 教授 飯倉 洋一 副 査 大阪大学 教授 加藤 洋介 副 査 大阪大学 講師 山本 嘉孝
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 江戸戯作の研究—山東京伝の諸活動を中心に—

学位申請者 有 澤 知 世

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	飯倉 洋一
副査	大阪大学教授	加藤 洋介
副査	大阪大学講師	山本 嘉孝

【論文内容の要旨】

本論文は、近世後期、江戸の地で作られた戯作（江戸戯作＝後期戯作）と、その作者である戯作者、そして戯作者の交遊について、代表的な江戸戯作者である山東京伝の諸活動を中心に考察したものである。

全体を三部構成とし、第一部では京伝の戯作の制作方法について草双紙を中心に論じ、第二部では文化・文政期における京伝・式亭三馬・小枝繁らの戯作の相互影響関係を中心に論じ、第三部では京伝の考証趣味に関わる交遊関係に着目した諸論を展開している。（400字詰原稿用紙換算で約344枚）

第一部第一章では、京伝の黄表紙『唯心鬼打豆』が、朋誠堂喜三二の黄表紙に拠りつつ、上田秋成『雨月物語』「夢応の鯉魚」をも利用していることを指摘している。第二章では、京伝が合巻でしばしば（図会もの）を用いていることに注目し、『日本山海名産図会』と『授津名所図会』の利用例について検討している。第三章では、合巻作品において他ジャンルの作品を素材として利用する場合の工夫について、京伝『籠釣瓶丹前八橋』の『伽婢子』利用を例として論じている。

第二部第一章では、小枝繁の読本『蓮生法師行脚日記玉廻露』に京伝の合巻『梅由兵衛紫頭巾』が利用されていることを指摘している。第二章では、京伝と三馬とがほぼ同時期に刊行された互いの作品を利用しあうことによって、一定のモチーフに変化を加え続けていたことを複数の作品を通して指摘している。第三章では、京伝の読本『本朝酔菩提全伝』に登場する野晒悟助が身に着けている着物の髑髏模様が、後世の戯作のみならず、演劇・浮世絵等の文化表象全般に影響を与えたことを明らかにし、隣接するジャンル間の交流が盛んであったため、作者と読者の間に共通認識が形成されやすかったことを述べている。第四章では、三馬が執筆した広告文に注目し、著名な戯作者の名前には商品価値があり、それが全国的な〈ブランド〉であったことを指摘している。

第三部第一章では、京伝の合巻作品にみられる異国意匠の取材源を探索し、蘭学者森島中良が舶来のラベル類を集めた貼込帖がそれであることを指摘し、それは近藤正斎や大田南畝周辺の知識人たちの間で〈異国ブーム〉が興った影響であることを明らかにし、知識人たちの動向と戯作とが深く関わっていることを述べている。第二章では、京伝が関わった古書画考証のグループについて考察している。具体的には、狩野派の絵師菅原洞斎が絵師の落款・印章や伝記を集めた『画師姓名冠字類抄』への資料・情報提供者に注目し、古書画考証趣味をめぐる人的交流の一端を明らかにしている。付章として、洞斎が主催した古書画展覧会の内実について、参加者の一人

であった屋代弘賢の書留を手掛りに明らかにしている。

#### 【論文審査の結果の要旨】

江戸時代後期の戯作研究は、従来、主としてジャンル別研究、作者別研究、個々の作品研究という方法で行われ、成果を挙げてきた。しかし、江戸戯作とは何かという大きな問いを立てた時に、それに答える研究は、半世紀前の中村幸彦『戯作論』（1966年）以来、ほとんど存在しないとあってよいだろう。本論文は、この困難な課題に答えようとする志を持つ、総合的な江戸戯作論を目指したものだと言える。

本論文を構成する各論には、新しい典拠の指摘をはじめとする、数々の新見が認められる。第一部第一章「京伝黄表紙と「夢窓の鯉魚」」では、京伝が自身の黄表紙に『雨月物語』を利用していることを明らかにした。典拠の指摘だけでもインパクトがあるが、同時に従来の説よりも七年早い時期に上方読本から江戸戯作への影響があったことを明らかにしたことが大きな意義を持つ。また第一部第二章では、京伝が、合巻作品に、名産図会・名所図会の挿絵を切り貼りするような仕方で利用していることを鮮やかに指摘した。さらに第三部第一章では、京伝の合巻の異国趣味的な絵や挿絵に、森島中良の『惜字帖』という貼込帳に貼られた珍しいラベル類を、何度も利用していることを明らかにしたことは重要である。というのは京伝と中良については従来確執説が議論されており、その問題を考えるヒントを提供するのみならず、戯作の素材を蘭学者としての中良に借りたという点で、当時の異国趣味嗜好の知識人達との交遊も浮上してきて、文学史研究上の広がりをもつからである。さらに第三部第二章では、著名な鑑定家菅原洞齋と京伝の関わりも明らかにしたが、この点も従来ほとんど知られておらず、戯作者の知的背景を指摘することになったことは高く評価できる。

他方、テキストの典拠や影響関係を論じる際に、字句レベルあるいは図像の部分が完全に一致している場合と、にわかには認定しにくい場合（例えば第二部第二章）との差が大きい点に問題がある。また、京伝の事例をもって江戸戯作という大きなテーマが論じ切れたかどうかについては、やや疑問で、従来の研究が定義する「戯作」や「戯作者」に対して、新しいイメージを提案するには至っていない。

以上のような問題点は含んでいるものの、本論文が、江戸戯作の全体像を考えるという大きな展望の下、多様な観点からの考察を積み重ねることで、後期戯作者にも〈雅〉への志向があることを明らかにし、数々の新見が近世文学史研究にインパクトを与えるものであったことは大いに評価できると思われる。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。